法華経の成立的研究（一）

——特に本門の正宗分を中心として——

大川円道

一

法華経の成立に於いて原始分とされる序品から如来神力品（提婆達多品を除く）に至る二十品の偈文の韻律は Triṣṭubh と Śloka である。これに対して後分とされる諸品の偈文の韻律には Puṣpitāgrā, Vaitālīya, Śālinī がある。[1] この様に、原始分と後分とに於いて偈文の韻律にも明確な相違が認められる。このことは、法華経の成立関係と韻律とに関連があるのでないかと推測される。故に、この視点に於いて、原始分とされる偈文の韻律である Triṣṭubh と Śloka を検討すると、

㈠　両韻律からなる偈文群に於いては位置的に Śloka の偈文が Triṣṭubh の偈文に先行すること。

㈡　妙本に於いて散文の重頌とする偈文の韻律を検討すると、ほとんどが Triṣṭubh を有する偈文群であること。

㈢　妙本になく後分とされる薬草喩品後半の偈文の韻律がすべて Śloka であること。

などの様な相違が認められる。このことは、この原始分の韻律である Triṣṭubh と Śloka に於いても、成立的に分離できるのでないかと推測され、さらに分離が可能ならば Triṣṭubh の偈文が Śloka の偈文に成立的に先行するのでないかと想定される。

以上の様な視点に於いて法華経の成立関係を考察しようとするのであるが、特に本門の正宗分を中心とするところの従地涌出品（XIV）、如来寿量品（XV）、分別功徳品（XVI）の三品について検討する。

二

まず初めに、この三品の偈文の韻律を示すと、Triṣṭubh の偈文は従地涌出品の第三三偈から第五四偈、如来寿量品の第一偈から第二三偈、分別功徳品の第一偈から第一六偈、第五八偈から第六二偈であり、Śloka の偈文は従地涌出品の第一偈から第三二偈、分別功徳品の第一七偈から第五七偈である。

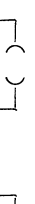
つぎに、この三品を内容的に区分すると、㈠従地涌出品の前半、㈡従地涌出品の後半、如来寿量品、分別功徳品の前半、㈢分別功徳品の後半の三つに分離できる。天台智顗は㈠を本門の序分、㈡を本門の正宗分、㈢以降を本門の流通分とする。この内容的分離と偈文の韻律との関係は、序分に相当する偈文が Śloka であり、正宗分が Triṣṭubh であり、流通分に於いて再び Śloka となる。すなわち、内容的分離と偈文の韻律に於ける区分とが一致するのである。

（図参照）

つぎに、散文と偈文の関係であるが、従地涌出品の第一偈から第二偈［a］、第三三偈から第三六偈［d］、第三七偈から第四三偈［e］、第四四偈から第五四偈［f］、如来寿量品の第一偈から第二三偈［g］、分別功徳品の第三七偈から第六二偈［j］は散文と構成的に一致する。従地涌出品の第三偈から第四偈［b］、第五偈から第三二偈［c］は散文と連続する関係にあり、分別功徳品の第一

偈から第一六偈〔h〕は散文と構成的に相違し、第一七偈から第三六偈〔i〕は散文の一部の内容を詳説する。布施浩岳博士は〔c〕・〔h〕・〔i〕を散文と相応するとし、〔g〕を不相応とする。[3] しかし、〔c〕は散文と類似する内容であるが構成的に相違する。〔h〕も散文と類似する内容であるが、散文は世尊の弥勒等に対する解説であるのに対して、偈文は弥勒等の世尊に対する了解であり相違する。〔i〕は散文の中の五波羅蜜を詳説する内容であり、散文の全体に対しての重頌でない。〔g〕は散文に比較して簡潔であり、散文は比喩が詳細であるが構成的に一致する。この散文と偈文との関係を韻律に於いて分類すると、Triṣṭubh の偈文群は①散文と一致する、②散文と相違する、であり、Śloka の偈文群は①と③散文と連続する、④散文の一部を詳説する、である。このことから、少なくとも Śloka の偈文群に於いては内容的に散文と分離できない関係にあることが理解できる。(図参照)

(一) 序分



(二) 正宗分

(三) 流通分

( )＝散文
〔 〕＝偈文
＊＝Triṣṭubh のみの群

つぎに、散文と偈文を分離して内容的に理解できるかを検討すると、序分に於いては偈文が散文と連続する関係にあるのであるから分離することができない。正宗分に於ける偈文は(1)弥勒等の勧請、(2)世尊の解説、(3)弥勒等の了解と完結するが、散文に於いては(3)に相当するところがなく(3)の〔h〕を必要とするのである。流通分は〔i〕が内容的に散文の一部の詳説であるため偈文のみで理解することができないが、散文は理解することができる。すなわち、Śloka の偈文群は散文と分離することができないのであり、散文も Śloka の偈文群を必要とするのである。これに対して、正宗分の Triṣṭubh の偈文群は偈文のみで理解できるのであり、むしろ散文の方が偈文を必要とするのである。(図参照)

三

以上のことから、Triṣṭubh と Śloka の偈文の散文との関係を成立的に検討すると、正宗分の Triṣṭubh の偈文は内容的に完結し、独立するのに対して散文は偈文を必要とするのであるから偈文が散文に成立的に先行すると考えられる。Śloka の偈文は散文と不可分の関係にあるから成立的に同時期であり、あるいは散文の一部を詳説するのであるから散文よりのちの成立と考えられる。この様に、Triṣṭubh の偈文は散文に先行し、Śloka の偈文は少なくとも散文と同時期であるから、Triṣṭubh の偈文は Śloka の偈文に成立的に先行するということができよう。

1 韻律の分類は荻原雲来土田勝弥共訳『改訂梵文法華経』の序による

2 布施浩岳『法華経成立史』五一頁—五八頁